

福沢諭吉著『世界国尽』に関する一研究 ——書誌学的調査——

源 昌久*

I はしがき

本稿は明治時代、最大の啓蒙思想家のひとり福沢諭吉(1834(天保5)–1901(明治34))の地理学に関する書誌学的研究の第一報であり、筆者がこれまで空白であった明治地理学形成前史について発表してきた、志賀重昂(1863(文久3)–1927(昭和2)),内村鑑三(1861(文久元)–1930(昭和5)),矢津昌永(1863(文久3)–1922(大正11)),山上万次郎(1868(明治元)–1946(昭和21))等の論考に続くものである。なお、今回の研究は、福沢の地理(学)関連著作の内、『世界国尽』(1869(明治2)年)をとりあげ内容を調査・検討し、その原拠本の確定を主目的とし、今後発表する本格的考察のための基礎的資料を提示することを試みている。従って彼の地理学体系およびそれが彼の思想の内に占める地位についての発表は、後日に期したい。

筆者が『世界国尽』を論題としてとりあげた動機のひとつは、同書の内容が今日の意義を有していると考えられるからである。本書は、明治初期に多数部(一説に百万部)刊行され、国民との結びつきが非常に強く、国民の国際理解を深め、地理的知識の向上を計っている。現在、学校教育の場にとらわれない広い意味での地理教育が一般国民にどれ程、密接な繋がりを持っているのか。さらに、地理についての知識向上に努力しているのか。本書の内容(表現を含めて)を考察することは、現在の地理教育を検討する上で欠くことのできないものと思われたからである。

『世界国尽』を論じる前に、同書が出版された当時の時代背景について少し触れてみたい。幕末、アメリカを始めとする列強の開国要求により、1854(安政元)年、江戸幕府はアメリカと和親条約を締結し、下田・

函館2港を開いた。次いで、ロシア、イギリス、オランダとも和親条約が結ばれ、諸外国と国際関係を持つことになり、二百年以上続いた鎖国政策解消の糸口が開かれた。1860(万延元)年、日米条約批准交換のために幕府は使節をワシントンへ遣わした。この使節の一員として、福沢は参加し、近代国家アメリカを直接に見聞した。開国後、先進資本主義国家の欧米との貿易が開始され、日本は世界市場に組み込まれ、経済の大変動が引き起こされた。経済的にも政治的にも遅れていた日本では、植民地化されるのではないかという危機感が生じてきた。このような状況の中、反幕府勢力の増大に伴い徳川政権が崩壊へと進行し、明治維新を迎えた。新政府は開国進取の方針で望み、国際社会の一員として出発した時期であった。

ここで、福沢の地理(学)および地理(学)関連の著作(翻訳に近いものも含む)の主要なものについてリスト・アップしてみよう。(タイトル等の書誌記述方式は、後述のII. 1. (2)および(5)の規則を準用する。)

- 1) 『[万延元年アメリカハワイ見聞報告書]』 1860(万延元)年
- 2) 『[西航記]』 1862(文久2)年
- 3) 『[西航手帳]』 1862(文久2)年
- 4) 『唐人往来』(表紙) 1865(慶応元)年
- 5) 『西洋事情』(見返し)(初編)三冊本 1866(慶応2)年
- 6) 『[慶応三年日記]』 1867(慶応3)年
- 7) 『西洋旅案内 付録万国商法』(見返し)二冊本 1867(慶応3)年
- 8) 『条約十一国記』 1867(慶応3)年
- 9) 『西洋事情外編』(見返し)三冊本 1867(慶応3)年 [1868(慶応4)年]
- 10) 『<訓蒙>窮理図解』(見返し)三冊本 1868(明治

* 淑徳大学社会学部

元)年

- 11) 『掌中万国一覽』 1869(明治2)年
- 12) 『<頭書>大全>世界国尽』(外題)六冊本 1869(明治2)年
- 13) 『西洋事情二編』(見返し)四冊本 1870(明治3)年
- 14) 『<啓蒙>手習の友』(見返し)二冊本 1871(明治4)年
- 15) 『<子供必用>日本地図草子』 1873(明治6)年
- 16) 『道中日記』(表紙) 1889(明治22)年

上記の他に『学問のすすめ』等も地理学に言及している箇所が見受けられる。このように、福沢の主たる地理(学)および地理(学)関連の著作は、1860年から1873年頃までの14年間にほぼ集中し、『世界国尽』は、この14年間の半ばより後に刊行されたことが判る。

この期間に福沢は外国を直接、見聞する機会を3回得ている。第1回目は、既述したとおり、1860(万延元)年、日米条約批准交換のために幕府が使節をワシントンへ遣わした際に、この使節の一員として参加。第2回目は、1865(慶応元)年1月から12月までの遣欧使節の随員としての体験であった。第3回目は、1867(慶応三)年1月から同年6月まで、幕府の軍艦受取委員の一員として再度、渡米体験をした。渡米中、福沢は地理書を含む学校用教科書を大量にしかも同じ書物を複数分、購入した事実は注目すべきである。

福沢の地理学に関係した活動として、1879(明治12)年4月、英国のRoyal Geographical Society にならって設立された東京地学協会の会員としての経歴が挙げられる。彼は、協会が発足以来、4ヵ月余りで退社している。退社理由について、石田(1969, p.7)は、“肌合いからいっても合わなかったのであろう。”とし、辻田(1975, p.294)は、“民主的な福沢は、貴族的・社会的な協会の水に合わないことを自覚したのか、...”と記している。

なお、本稿中のタイトル、固有名詞、引用文は、本誌の執筆要領に従い、出来る限り常用漢字を使用し、変体仮名・異体字は通行の表記に改める。引用文の振り仮名は、原拠に拠らず地名等、最少限度に止める。タイトル中の二行割書、角書きは、<>内に入れ、小ポイント活字で示す。引用文を慶応義塾編纂(1958-1964)『福沢諭吉全集』による場合は、『全集』と略

し、巻号はアラビア数字で示す。

II 『世界国尽』

1. 書誌的調査

『世界国尽』は、福沢の著書のうちでも最も多くの発行部数を有した書物のひとつであり、各種の版本や偽版も出版された。ここでは本稿の底本とする『<頭書>大全>世界国尽』(以下、書誌以外では『頭書』と略す)および『<素本>世界国尽』、『<真字素本>世界国尽』について書誌的事項を簡単に¹⁾記してみよう。

本書誌の書誌的事項の記載方法は下記の規則に従う。

(1) 記載の順序は『(総合)タイトル』、責任表示、その版に関する事項、出版事項、対照事項。

各著作のタイトルがある場合は、『タイトル』、丁数を記す。

(2) 本文巻頭以外のタイトルを採用した場合には、タイトルのあとに()で注記する。

(3) 目次等で内容を知るために重要と思われた著作については、(内容)の項に記す。

(4) 本の大きさの表示について、半紙判は半、大本の半截は中と記す。

(5) [] 記号は定められた情報以外から得た語や数字を補記したい場合に使用する。

() 記号は説明を加えたり限定する場合に使用する。

/ 記号は原文で改行になっている場合に使用する。

なお、使用した書物は、慶応義塾福沢研究センター所蔵のものである。

1) 『世界国尽』 6巻 福沢諭吉訳述 慶応義塾蔵版 江戸 岡田屋嘉七 明治2(1869)(木版)半 6冊

a. 『<頭書>大全>世界国尽 亜細亞洲 一』(外題) 序文4丁 凡例3丁 目録2丁 本文17丁 折込色彩地図[2(東の半世界・西の半世界)(亜細亞洲)] 面 慶応義塾蔵版目録1丁半

(内容) 目録

一の巻 発端 亜細亞洲 同頭書図入

二の巻 阿非利加洲 同頭書図入

三の巻 欧羅巴洲 同頭書図入

四の巻 北亞米利加洲 同頭書図入

五の巻 南亞米利加洲 同頭書図入 大洋洲 同頭

書図入

六の巻 地理学の総論 天文の地学 自然の地学
人間の地学

- b. 『<頭書/大全> 世界国尽 阿非利加洲 二』(外題) 本文16丁 折込色彩地図[1]面
c. 『<頭書/大全> 世界国尽 欧羅巴洲 三』(外題) 本文33丁 折込色彩地図[1]面
d. 『<頭書/大全> 世界国尽 北亜米利加洲 四』(外題) 本文24丁 折込色彩地図[1]面
e. 『<頭書/大全> 世界国尽 南亜米利加洲 大洋洲 五』(外題) 本文19丁 折込色彩地図[2]面
f. 『<頭書/大全> 世界国尽 附録 六』(外題) 本文22丁 奥付

2) 『世界国尽』 6巻 福沢諭吉訳述 慶応義塾蔵版 再版²⁾ 江戸 岡田屋嘉七 明治4(1871) [明治5(1872)]³⁾ (木版) 半 6冊

- a. 『<頭書/大全> 世界国尽 亜細亞洲 一 再刻』(外題) 序文4丁 凡例3丁 目録2丁 本文17丁 折込色彩地図[2]面
b. - e. ⁴⁾
f. 『<頭書/大全> 世界国尽 附録 六 再刻』(外題) 本文22丁 慶応義塾蔵版目録[1]丁 奥付

2-1) 『世界国尽』 6巻 福沢諭吉訳述 慶応義塾蔵版 再版 江戸 岡田屋嘉七 明治4(1871) [明治5(1872)] (木版) 半 合3冊

- a. 『<頭書/大全> 世界国尽 亜細亞洲/阿非利加洲 卷之一二 再刻』(外題) 序文4丁 凡例3丁 目録2丁 本文33丁 折込色彩地図[3]面
b. 『<頭書/大全> 世界国尽 欧羅巴洲/北亜米利加洲 卷之三四 再刻』(外題) 本文57丁 折込色彩地図[2]面
c. 『<頭書/大全> 世界国尽 南亜米利加洲/大洋/附録 卷之五六 再刻』(外題) 本文41丁 折込色彩地図[2]面

3) 『世界国尽』⁵⁾ 3巻 福沢諭吉著 江戸 福沢諭吉 明治5(1872) (木版) 中 合3冊

- a. 『<素/本> 世界国尽 一』(外題) 本文37丁 折込色彩地図[1(東の半世界・西の半世界)]面⁶⁾
b. 『<素/本> 世界国尽 二』(外題) 本文37丁

c. 『<素/本> 世界国尽 三』(外題) 本文50丁 (版下書家の署名)

4) 『<真字/素本> 世界国尽』⁷⁾ 福沢諭吉著 福沢氏版 明治8(1876) (木版) 半 1冊 本文24丁半 奥付

2. 『頭書』の内容および表現上の特徴

本節では『頭書』の内容および表現上の特徴について言及してみよう。

1) 内容に関する特徴 本書は、II-1. -1) - a. (内容) で示したとおり、世界全体を地域別に日本の属しているアジアを最初に述べ、次ぎにアフリカ→ヨーロッパ→北アメリカ→南アメリカ→大洋洲(オセアニア)の順に解説している世界地誌の書物であり、かつ、手習い(習字)・読方の役割をはたしている教材でもある。学制発布(1872(明治5)年)以降、下等小学の地学読方、地学輪読の教科書として採用されている。

本書の作法について福沢は、「一 此書は世間にある翻訳書の風に異なれども、…」(一の巻 凡例 第五丁オ)と記し、欧米の地理書、歴史書のエッセンスを集めて翻訳を行ったとしている。『頭書』の刊行される前年(1868(明治元年)年)6月7日付の山口良蔵宛の手紙中で福沢は、「… 翻訳物も現金にて仕候。… 一 兵書、窮理書、地理書、舍密書、新聞紙の類、十行二十字の訳書一枚に付代金壹両。」(『全集』17, p.56.)と記し、翻訳者として生計をたてる決意を述べている⁸⁾。この点からも明治初期には彼は翻訳を力をいれていたことがうかがわれる。さらに、筆者は、『頭書』の見返しに「福沢諭吉訳述」(筆者下線)と記載されている点からも、本書を著書と言うよりも訳書に近い書物と見ている。

始めに、『頭書』六巻の内、筆者が地理学史研究上、最も重要と見ている六の巻の特徴(内容面)について述べてみよう。一の巻から五の巻までの内容は、挿絵図付世界地誌で、六の巻の内容は、系統地理である。六の巻では、「地理学の総論」で始まり、「天文の地学」「自然の地学」「人間の地学」の順に地理学を頭書を付せずに解説している。地理学を三分野に分ける方法は、名称および構成順序の違いを別にして、「江戸時代に伝えられた17世紀の地理学以来共通」(日

本地学史編纂委員会、1993、p.882)のものである。福沢が系統地理を六の巻付録として位置づけている点は注目すべきである。当時の英米版地理教科書は、菅見の限りでは、世界地誌の記述に入る前、つまり、冒頭の部分において系統地理を説明している場合が多い。さらに、II-1. -3)・4)で示したように、『<素/本>世界国尽』・『<真字素本>世界国尽』は、六の巻を付していない。上述の事柄は、次ぎのことを意味しているのではなからうか。系統地理に関する記述は、地理学を理解する上では、重要であり、一の巻から五の巻の内容を理解する際の基礎的なバック・ボーンである。しかし、それは、やや抽象的な側面も含み、明治初期の本書の対象読者層（児童婦女子）にとっては、理解しがたい部分を有している。そこで、一の巻の冒頭において系統地理に関する記述を行うと、読者が地理学アレルギーを引き起こす危惧を福沢は感じていたのではなからうか。当時の民衆に世界地理の知識を判りやすく教えることが文明開化期の啓蒙地理書にとって第一の任務であり、読者もそれを望んでいたもので、上記のような結果になったと思われる。

次ぎに、『頭書』上梓の目的について見てみよう。福沢自身が目的について序で、“専ら児童婦女子ノ輩ヲシテ世界ノ形勢ヲ解セシメ、其知識ノ端緒ヲ開キ、以テ天下幸福ノ基ヲ立テントスルノ微意ノミ”（一の巻 序 第一丁オ）と述べている。明治初期、内外の社会情勢が激動する中、児童・婦女を対象に世界地理を教えて、天下（国家）の幸福の基本になることが本書の究極の目的である。

第三に、福沢が『頭書』中において資料・データをいかに扱っているかを考察してみよう。本書は、往来物の分類系の中においては、地誌型⁹⁾に属している。同型で世界を記述対象としたものが盛んに刊行・編纂されるようになったのは、明治以降のこと¹⁰⁾である。本書は、他の地誌型往来物に比較すると、地勢、産物、人口数等の地理情報（計数データを含む）を正確に、詳細に記載している。例えば、『<童叢撰>西洋往来』（1868(明治元)年刊、作者不明、本文15丁）¹¹⁾では、記載国の面積、人口数共に表記されていない。また、『<銅版画>万国往来』（1871(明治4)年刊、四方茂平著）¹²⁾では、日本から他国への航海上距離は記されているが、記載国の面積、人口数、政体等については言及されていない。

第四に、『頭書』に見られる歴史的観点について記してみよう。本文（一の巻から五の巻まで）および頭書を調べて見ると、地理情報と併せて、歴史、特に、記載国の18-19世紀の歴史、つまり、当時の近・現代史（戦争史、建国史）が記されていることが判る。明治初期から中期にかけて読まれた歴史教科書（原書）の一冊である『パルリー万国史』（*Peter Parler's universal history; on the basis of geography*）¹³⁾（筆者下線）が地理に基づく歴史書であるのとは対照的に、『頭書』は、歴史に基づく地理書と言えよう。地理情報と共に当時の各国事情を記述することで、福沢が国家の成立プロセスを紹介しながら、自国の新国家形成の理念および将来像を理解させようとする意図を筆者は見出す。なお、六の巻「人間の地学」中で述べられている政府の体政（三種：立君、貴族合議、共和政治）に関しても、同様の理由から説明¹⁴⁾が加えられ種別ごとに多数の国が明記されている。

2) 表現上の特徴 始めに、挿絵図（福沢は「図」と表記）について見てみよう。『頭書』に関する先行研究資料を見ると、頭書部分（六の巻のみ本文）に掲載されている木版刷の挿絵図に言及し、著者等はそれらの挿絵図が内容の理解を深めかつ楽しく読み易くしていることを指摘している。挿絵図は、正確に描かれ、本文および頭書の解説に役立つように掲載されている。山口（1992、p.55）は、自身の体験談で挿絵図の風景描写の精確さを傍証する言葉として、『頭書』の「香港の景」（一の巻 第五丁オ）に関連し、次のように述べている。

ヴィクトリア・ピークを背景に香港島の市街を望むその写真は、諭吉が『世界国尽』に掲げた「香港の景」（第十三図）とほぼ同じ構図になった。

これらの挿絵図は、本書がベスト・セラーであったことも一因¹⁵⁾となり、場所のイメージを固定させる作用をしたと思われる。つまり、『頭書』の挿絵図は、対象の地域・国々を代表するイメージを形作る上で貢献し、明治以降、日本人のステレオ・タイプの海外に関する景観イメージ形成に極めて影響が大きかったと言えるのではないかと。

挿絵図と頭書の説明は、本文の七五調で簡潔にまとめた文章の理解に役立つように工夫されている。このような工夫は、江戸時代の往来物に見られるスタイル

である。それは、「頭書画入」「頭書絵入」等の形式と同様であり、伝統的な様式を踏襲したのものであると考えて良いであろう。

次に、本文の文体について述べてみよう。文章は、漢字（総振り仮名付き）と平仮名を使用し、七五調の韻文体で書かれ、児童にも読み易くかつ口誦し易く記述されている。また、それらの文章は、草・行書体で記されている。これらの編集手法は、従来の往来物に既に活用されていたもので、福沢が新規に工夫したものではない。前述に関連して、教育史的見地から考察するならば、『頭書』の物理的数量が問題になる。『頭書』は、手習い（習字）の教材として目的のみで作成されたのではなく、読本としての用途を有していた。習字用の手本は、半年ないし一年で別のテキストに改める習慣があった。故に、習字用の手本は、大冊のものは使用されない。しかし、読本としても用いられると、分量には制限がなくなり、大部のものでも使用可能になる。『頭書』は、このような従前の習字主義から読書主義路線への転換期に位置付けられる。本書が六冊から構成され大部になった点は、新しい時代に沿った展開である¹⁶⁾。

第三に、『頭書』中における外国地名・人名の表記の仕方について述べてみよう。本書の凡例で、福沢は、“故に此書中には勉ては日本人に分り易き文字を用るやふにせり”（一の巻 凡例 第六丁オーウ）と記している。従来の地理書では、地名の読み方は唐音の漢訳字を当てたりして、“国地名に定字なし”と注記するものが多く見られた。福沢は、凡例で述べた方針に沿い、外国地名・人名の読み方に和訓字を当てている。西浦（1970, p.317）は、この新しい展開を“大胆な旧習打の実践表記”とみなしている。例えば、ペルー（Perú（スペイン語）、Peru（英語））は、江戸期の地理書および明治初期の外交文書では李露、庇魯、秘魯、白魯と記されていたが、『頭書』では、平柳と表記されている。なお、地名の読み方に和訓字を当てる仕方の最初の例として、明治文化研究会（1969, p.1276）は、“万延元年（筆者注：1860年）作、桂園森田行（筆者注：森田清行（1812（文化9）年—1861（文久元）年）。1860年、日米条約批准の際、随員として渡米）の〔航米雑詩〕に、虬鬚碧眼花間宰、…”をあげ、福沢を“和訓音訳の中興開山”と位置付けている。

以上のように、『頭書』における内容および表現上の

特徴について筆者はまとめてみた。その結果、福沢は、江戸時代の往来物にも見られる表現形態——七五調の文体、漢字・仮名混じり文、頭書画入等——を採用している。一方、彼は、正確な地理・歴史情報および国家形成期の国民に必要な知識を上手に伝統的手法を活用して判りやすく理解させた。この意義は非常に大である。

Ⅲ 『頭書』の原拠本に関する調査

『頭書』の著述（作成）には、Ⅱ-2. -1)で既述したように、なんらかの翻訳のための原拠本が使用されたことは明らかである。太田（1976, p.131）は、福沢の著訳書の原拠本についての研究を発表し、そこで『頭書』に関して、“明治二年刊の「世界国尽」（全集第二巻五七九—六〇八）の歴史の部分、…上記の書〔筆者注：歴史に関する原書11冊が列記されている〕が随所に利用せられたが、パーレイは特に逐語訳の箇所もある。”と指摘している。しかし、前述以外の詳細な調査は試みられていない。筆者は、『頭書』の原拠本を探索するため、福沢が披見した可能性のある書物を含むと思われる『慶応義塾図書館 洋書目録』（1906年刊）¹⁷⁾中のGeography and travelsの項に掲載されている図書、福沢の著訳書に記載されている英米の地理学書、『〔著者注〕『〔著者注〕『〔著者注〕』』¹⁸⁾等を調査し、該当書を探すことを試みた。その結果、挿絵図（計108図）中、83図（約77%）に関しての原典および六の巻についても部分的に原拠本を見出した。

1. 挿絵図の原典

筆者は、挿絵図の原典を調査する際、『頭書』の全図に通し図番号を付して、原拠が判明したものに出典を記して整理したものが第1表であり、さらに、集計結果の数値をまとめたものが第2表である

原典が判明した計83図について調べて見ると、次ぎの二点のことが言える。

第一に、福沢は、『頭書』の記述に際し、少なくとも五種以上の原書を活用して、若干の例外（例えば、図番号7）を除いて、本文および頭書の解説に適切な図を原書から選択し、付している。

第二に、大部分の挿絵図は、構図が同一である（第1図参照）のとともに、原典の銅版画のタッチを木版画

第1表 『頭書』中の挿絵図の原典調査

原拠本文献番号 1)MS G.(1872) 2)Cornell's high school geography.(1868) 3)『地学初步』 4)A pictorial hand-book of modern geography...(1865) 5)Peter Parley's universal history...(n.d.) *記号を付した図は、『頭書』中の挿絵図と構図等が多少異なる。

図番号	ノンブル	題目(キャプション)	出典(題本)	原タイトル
1	一の巻3丁	亜細亞人種 支那の下人	1)p. 33	The mongol race. (A Chinese laborer.)
2	二の巻4丁	(無題)	原拠本不明	
3	三の巻5丁	香港の景	1)p. 377	Hong-Kong.
4	四の巻7丁	孔子門人へ教る図	5)p. 104	*Confucius and his disciples.
5	五の巻9丁	鷹寺洲河の景 <small>がんじすかわ</small>	1)p. 365	Scene on the Ganges.
6	六の巻10丁	軽骨田奉行所の景 <small>かるこた</small>	1)p. 368	Government-house, Calcutta.
7	七の巻10丁	印度の人 象にのる	1)p. 371	Scene in Siam.
8	八の巻11丁	獅子 うはばみを喰ふ	1)p. 367	Asiatic lion.
9	九の巻12丁	「べるしや」の男女 家内のありさま	1)p. 360	Group of Persians.
10	十の巻14丁	「あつひ」の人 らくだり勲新行 <small>あつひ</small>	原拠本不明	
11	十一の巻15丁	馴鹿 櫓を引て氷を渡る <small>じゆんかく</small>	原拠本不明	
12	十二の巻17丁	嘉無薩加の景 <small>かむじあ</small>	原拠本不明	
13	一の巻1丁	あふりか人 <small>あふりか</small>	1)p. 412	Ashantee. [アシャンティ(種)]
14	二の巻3丁	内留河大水の景	1)p. 404	Overflow of the Nile-Suez railroad.
15	三の巻5丁	「びらみで」の図	1)p. 401	Pyramid of Cheops, and Sphinx.
16	四の巻5丁	(無題)	1)p. 406	Natives hunting the hippopotamus.
17	五の巻7丁	麻田槽艇の都 棚奈龍の景 <small>またたせがら</small> <small>たなごりゅう</small>	1)p. 428	City of Tananarivou, Madagascar.
18	六の巻8丁	喜望峯の景	1)p. 417	Cape Town-Table mountain.
19	七の巻9丁	獅子 人を喰ふ	1)p. 414	African lion.
20	八の巻10丁	丹路留の景 <small>たんじろ</small>	2)p. 282	Tangier, Morocco.
21	九の巻11丁	「あるぜりや」の景	1)p. 393	City of Algiers.
22	十の巻13丁	砂漠へ入口の景 <small>まてらし</small>	1)p. 396	Gate to Sahara.
23	十一の巻15丁	麻寺島の景 <small>あしや</small>	1)p. 426	Funchal, Madeira Island.
24	十二の巻16丁	新都辺礼奈の景 <small>しんたへんれい</small>	2)p. 297	St. Helena.
25	三の巻1丁	歐羅巴人種 <small>えうらふじん</small>	1)p. 33	The Caucasian race.
26	四の巻2丁	今の皇帝第二世「あれきさんどる」 今の皇帝第三世「なばれおん」 <small>あれきさんどる</small> <small>なばれおん</small>	1)p. 39	Alexander II, Napoleon II, Francis Joseph.
27	五の巻3丁	今の英吉利女王 ひくとりや	1)p. 39	Queen Victoria.
28	六の巻4丁	無智の民 字を知らば戦ふなり	1)p. 36	The savage state.
29	七の巻5丁	いまだ家なくして てんまの所に居るあつひの民	1)p. 37	The barbarous state.
30	八の巻5丁	人家さまり 文字あれども 人情いやし「とるこ」 「べるしや」の類	1)p. 37	The half-civilized state.
31	九の巻5丁	文明化の人は書をよみ 人情をたしく 業をばし	1)p. 35	The enlightened state.
32	十の巻7丁	いざりすのみやこ「ろんどん」の風景	原拠本不明	
33	十一の巻9丁	蒸気車 伝信機	原拠本不明	
34	十二の巻11丁	ふらんすのみやこ「ばりす」の景	1)p. 301	Boulevard Sebastopol, Paris.
35	十三の巻13丁	仏蘭西帝第一世 なばれおん	原拠本不明	

36	社 14T	西班牙の都「まどりつと」の景 <small>いばにきや びるとがら</small>	2)p. 220	* Madrid, Spain.
37	社 15T	葡萄牙の都「りすばん」の景 <small>ポルトガル</small>	2)p. 222	* Lisbon, Portugal.
38	社 16T	「じぶらたる」の景	原拠本不明	
39	社 17T	丸太嶋の景 <small>まるたしよ</small>	2)p. 242	The Island of Malta.
40	社 18T	獅子里嶋 江戸奈山の景 <small>ししりしま えとごさん</small>	1)p. 336	Mount Etna, Sicily.
41	社 19T	いたりや国の風景	2)p. 211	Genoa, Italy.
42	社 19T	「しんとべいとる」宮殿の図	4)p. 237	St. Peter's, Rome.
43	社 20T	ぎりいきの都 安全洲の景 <small>あぜんしよ</small>	1)p. 334	The Acropolis at Athens.
44	社 21T	土留古の都「んけんちのぶる」の景 <small>とるこ</small>	1)p. 331	City of Constantinople.
45	社 22T	嶼地利の都 宇陰奈の景 <small>おみずとりや ういんな</small>	1)p. 326	Church of St. Charles, and the polytechnic school at Viena.
46	社 23T	普魯士 ^の 都「べるりん」王宮の図 <small>ぷろしや</small>	1)p. 297	Royal Palace, Berlin.
47	社 24T	瑞西 田舎の景 <small>すいせい</small>	1)p. 319	Swiss cottage.
48	社 25T	「あむすてるだむ」の景	1)p. 303	City of Amsterdam.
49	社 26T	骨片波辺 遊園の景 <small>こっぺん はへん</small>	1)p. 288	Grand square, Copenhagen.
50	社 27T	瑞典 ^の 都 須徳保留武 王宮の図 <small>すえいてん すとくほるむ</small>	1)p. 283	Royal Palace, Stockholm.
51	社 29T	平土留帝	原拠本不明	
52	社 30T	ろしやの都「べいとるぼるふ」の景	4)p. 276	St. Petersburg.
53	社 31T	「せばすとぼる」台場の図	4)p. 280	Sebastopol.
54	社 33T	もすこうの景	原拠本不明	
55	社 30T	古論武子 <small>ころんぶし</small>	原拠本不明	
56	社 3T	「ころんぶす」西班牙を出帆す <small>いせにや</small>	原拠本不明	
57	社 4T	「えすきもう」氷をつみたてて家とす	原拠本不明	
58	社 6T	「アムステルダム」の図 <small>あむすてらむ</small>	原拠本不明	
59	社 7T	喜別久台場の図 <small>きべく</small>	1)p. 70	Citadel, Qubec.
60	社 7T	金田の都 小田羽府 政事堂 <small>かねだ おだはふ</small>	1)p. 65	New parliament buildings at Ottawa.
61	社 10T	名将わしんとん	原拠本不明	
62	社 12T	ぶんける山の戦	原拠本不明	
63	社 16T	「ぼくとん」の図 英吉利の塔へ登る <small>いぎりす</small>	原拠本不明	
64	社 17T	「わしんとん」府 政事堂	1)p. 83	Capitol at Wasington.
65	社 17T	「にうよるく」市中 遊園の図	1)p. 110	View in Central Park.
66	社 18T	金山の穴の模様	1)p. 87	Gold-mining in Nevada.
67	社 19T	「めきしこ」の礦山学校	1)p. 204	College of mines, city of Mexico.
68	社 20T	「あかぼるこ」	1)p. 207	Acaplico.
69	社 22T	(無題-地図)	原拠本不明	
70	社 24T	「西いんど」の風景	1)p. 215	Scine in the West Indies.
71	社 24T	芭蕉	1)p. 212	* Banana-tree.
72	社 24T	「パイナップル」をちー 松子の如し <small>じゅんかご</small>	1)p. 217	(キャプションなし)

73	図の51ウ	南亜米利加の風景	1)p. 218	General scene.
74	社 2Tウ	「ばなま」の景	2)p. 156	Panama.
75	社 3Tウ	かるかすの景	1)p. 226	City of Caraccs.
76	社 4Tウ	武良尻の都「りをじゃねいろ」の景	1)p. 232	City of Rio de Janeiro.
77	社 5Tウ	「ぶらしり」の深山	2)p. 160	A scene in a Brazilian forest.
78	社 6Tウ	繩橋を渡る	1)p. 239	Bridge of ropes.
79	社 8Tウ	蝮蛇 人馬を害す	1)p. 221-	Boa-constrictor.
80	社 8Tウ	群猿 河を渡る	1)p. 246	Monkeys crossing a stream in South-America.
81	社 9Tウ	「けいぶほふるん」の景	原拠本不明	
82	社 11Tウ	べいりゅう国の都会「くすこ」の景	1)p. 236	City of Cuzcc.
83	社 12Tウ	南あめりかの嶋にて 鳥の糞を取る	原拠本不明	
84	社 14Tウ	呂宋の都 まにらの景	2)p. 314	Manilla, Island of Luson.
85	社 16Tウ	あふすたりやの港「しどに」	1)p. 436	City of Sydney.
86	社 17Tウ	めるぼろんの景	1)p. 437	City of Melbourne.
87	社 17Tウ	しんちらんどの人 群の賑わい	原拠本不明	
88	社 18Tウ	「しんちらんど」の景	1)p. 438	Auckland, New Zealand.
89	社 19Tウ	「はわい」嶋 火山の絶頂の景	原拠本不明	
90	六の56Tウ	(無題-地球の図)	原拠本不明	
91	社 3Tウ	(無題-方向を示す像)	3) 6Tウ	(キャプションなし)
92	社 4Tウ	羅針盤の図	2)p. 326	*The mariner's compass.
93	社 4Tウ	子午線 平行線	原拠本不明	
94	社 5Tウ	地球儀に経度緯度を刻みたる図	2)p. 397	(キャプションなし)
95	社 6Tウ	(無題-気候帯)	原拠本不明	
96	社 6Tウ	熱帯諸国の獣類	1)p. 26 1)	Elephants and the tiger.
97	社 7Tウ	駝鳥	p. 27 1)p.	Ostriches.
98	社 7Tウ	寒帯の獣類	25 1)p.	Polar bears.
99	社 7Tウ	(無題)	9 1)p. 10	Mouth of a river opening into the ocean. In the river,...
100	社 8Tウ	嶋・半島・地狭の図		Peninsula, isthmus, and islands.
101	社 9Tウ	火山	1)p. 11	A volcano.
102	社 10Tウ	大洋	1)p. 13	The ocean.
103	社 11Tウ	海	1)p. 14	A sea.
104	社 11Tウ	北米利加合衆国と金田との界にある湖	1)p. 15	Great lakes of North America.
105	社 12Tウ	谷川	1)p. 15	Spring and brook.
106	社 12Tウ	ないあがらの滝	1)p. 16	Falls of Niagara.
107	社 18Tウ	合衆国の陰にうろくを打つ景	1)p. 40	City of New Orleans.
108	社 22Tウ	亜米利加合衆国議事院の図	1)p. 42	The United State house of representative

で模写（刻）したと表現していると述べても過言でない程に原画を再現している。付言するならば、これは、明治初期、木版画作成に従事する熟達した職人が存在していたから可能になったのではなからうか。

第2表 原典調査の集計結果

原拠本文献番号	内容	引用された図数	(引用された図数/全体数)の比率
1)		67図	62%
2)		10図	10%
3)		1図	1%
4)		3図	3%
5)		1図	1%
(合計)		(82図)	(77%)

原拠本文献番号は第1表に対応。
%値は小数点第1位を四捨五入。

以下、原拠となった図書について述べてみよう。

文献番号1) *Mitchell's new school geography*. 挿絵図中67図(全図の約62%)が *Mitchell's new school geography*. (以下MSGと略す)(1872年刊)(複製版)に掲載されていた図からの転写である。MSGの序文(p.4)によると、図(銅版画)の大部分は描かれている対象物のオリジナルなスケッチに基づいて作成されたと記されている。一橋大学附属図書館所蔵本(刊年不明)の図を見ると、図周辺下部に微小文字で“VAN INCEN-SNYDER”と記されている場合がある。“VAN INCEN-SNYDER”は、画の作成者なのかあるいは彫り師なのか判断できない。MSGは、注19に記した通り、“Mitchell's new series of geography”の1冊で、ハイスクール用地理教科書である。同シリーズで本書より内容の易しいレベルの地理教科書として、*The new primary geography*...(1860年刊)等がある。本調査においては、MSGに掲載されている銅版画と同様の構図のものが“Mitchell's new series of geography”の他書に見出される場合、MSG分としてカウントしている。福沢の著作において、「ミッチル」地理書のタイトルは、『<訓蒙>窮理図解』の凡例中、“米版「ミッチル」地理書 千八百六十六年”(『全集』2, p. 237), 『掌中万国一覽』の凡例中、“同年(筆者注:1866年) 亜版「ミッチル」地理書”(『全集』2, p. 456)のように記載されている。しかし、これらの図書が Mitchell

のどの地理書なのかは同定できないが、筆者は、MSGの可能性が高いと推測している。

なお、日本地学史編纂委員会(1993, p.882)によると、MSGは、次ぎに述べる *Cornell's high school geography* と同様に学制期の下級〔等〕中学用地理教科書(原書)として、指定されていた。慶応義塾においても『<明治七年四月改正> 慶応義塾社中之約束』に掲載されている課業表から『ミツチエル地理書』(MSGの可能性が高い)が教科書として採用されていたことが判る(佐志(1986, p.49))。Mitchell および彼の著書については、「おわりに」で解説する。

文献番号2)・3) Sarah S. Cornellの著書 本調査で利用した Cornell (発音は[ko:rnél]) であり、コーネルの表記が近似)の著書は、次のとおり。*Cornell's high school geography*.(1868年刊)²¹⁾ (慶応義塾大学メディアセンター蔵): 2)

コル子ル氏著『地学初歩』(渡辺一郎複製 1866(慶応2)年刊 渡部氏蔵版 *Cornell's primary geography*. Revised.) (慶応義塾福沢研究センター蔵): 3)

2), 3)からの図の転写は、合計12図であるが、1)に比較すると『頭書』中の構図とまったく一致しているとは言い難いものも含まれている。また、2), 3)の図を多少、省略しているものもある。

福沢の著作において「コルネル」地理書のタイトルは、『<訓蒙>窮理図解』の凡例中、“米版「コルネル」地理書 千八百六十六年”(『全集』2, p.237), 『掌中万国一覽』の凡例中、“千八百六十七年 亜版「コルネル」地理書”(『全集』2, p.456), 外国諸書翻訳草稿の標題中、“千八百六十年 亜米利加開版「コルネル」地理書「クーソル」島の部”(『全集』7, p.471)のように記載されている。しかし、これらの図書が Cornell のどの地理書なのかは同定できない。

なお、前述の如く Cornell の地理書は教科書として使用され、明治初期の慶応義塾においても2), 3) (原書)共に日課表・課業表等から塾においても地理教科書として採用されていたことが判る(佐志(1986, p.32, p.45))・(慶応義塾(1958, p.282))。

文献番号4) *A pictorial hand-book of modern geography*... 本書中計3図が『頭書』三の巻へ転写されている。本調査では、1865年刊行本(東京大学附属図書館蔵)を使用する。

福沢の著作において「ボン」地理書ののタイトルは、



(a) 図番号9 出典:『頭書』一の巻代 12 丁ウ



(a') 原拠本の図(Group of Persians.)
出典:MSG. (1872) p.360



(b) 図番号 46 出典:『頭書』三の巻第 23 丁ウ



(b') 原拠本の図(Royal Palace, Berlin.)
出典:MSG. (1872) p.297

『<訓義>窮理図解』の凡例中，“英版「ボン」地理書千八百六十二年”（『全集』第二巻 p. 237）のように記載され、前記図書は上述の改訂版 2d ed. rev.(1862) であると思われる。

文献番号5) *Peter Parley's universal history...* 本書中1図が『頭書』の図番号4へ転写されている。しかし、構図は似ているが同一とは言い難い。本調査では、慶応義塾大学メディアセンター所蔵本 (school edition) を使用する。本書は明治前期、『パーレー万国史』として歴史教科書として広く採用され、明治初期、慶応義塾においてもテキストとして使用されている(佐志 (1986, p.32, p.45))・(慶応義塾 (1958, p.263, p.282))。早くも、1869(明治2)年、本書の翻刻本が木版で作られている(明治文化研究会 (1969, p.591))。

福沢の著作において「パーレーの万国史」のタイトルは、福沢文集二編 巻一 「三田演説第百回の記」に2度(『全集』4, p.477, 478)登場する。しかし、この「パーレーの万国史」が *Peter Parley's universal history...* か同著者の *Pictorial history on the world...* かは、現時点では判断できない。

2. 本文および頭書(除 挿絵図)の原拠本

本文および頭書(除 挿絵図)の原拠本の調査結果について述べてみよう。一の巻から五の巻までの世界地誌については、MSGからの翻訳と推測される箇所が若干、見出された。例えば、「いすばにあ」を解説した頭書の部分。“元来此国の人々は骨格もよく...”(三の巻 第14丁オ)は、MSGのp.311にほぼ該当する。MSG以外の図書からの翻訳については、現時点では不明。

六の巻の系統地理については、MSGからの翻訳が目立つ。六の巻は、地理学あるいは地理教育上、重要な意味を持つ²⁴⁾。なお、MSGは、問答体の形式をとりながら系統地理に関する記述→北アメリカ→中央アメリカ→南アメリカ→ヨーロッパ→アジア→アフリカ→オセアニア→南極大陸→統計の順で構成されている。

『頭書』六の巻とMSGとを以下、比較しながら考察を進めてみよう。六の巻の始めにある「地理学の総論」(六の巻 第一丁オー第二丁オ)の文章は、MSGの“Principles and definitions”(pp.7-8)中の質問に対する解答箇所に近似している。しかし、六の巻の始めでは、地理学をあすとのみかる・じょうがらひい→

ひしかる・じょうがらひい→ぼりちかる・じょうがらひいの順で説明しているが、MSGでは、physical geography→astoro geography→political geographyの順で説明している。

「天文の地学」(六の巻 第二丁オー第七丁オ)の文章は、原拠不明。

「自然の地学」(六の巻 第七丁ウー第十二丁ウ)について見ると、冒頭に掲げられている挿絵図(図番号99)(第2図)は、第1表で示したとおりMSGの“Natural or physical geography”の最初に記載されている画(第3図)と同一である。その画のキャプションが「自然の地学」の解説の始めにやや小さな文字で書かれている箇所に相当する。山住(1970, p.35)は本図(図番号99)について、“此図を見るに、...あとで学習をすすめるさいに必要なことがらをえがいた典型的な絵図によって、大まかなところを、まず知らせようという方針である。”(筆者下線)と記している。上述の方針のルーツは、MSGに求められる。

「自然の地学」の内容について、「こんちねんと」、島、半島、地峡、岬、大洋、海、湖水、河に関する記述は、MSGの問答体の解答の全訳あるいは部分訳である。山、火山、砂漠、入海、瀬戸は、MSGとは異なる。なを、MSGに記載されているCoast or shore, Oasisの説明は、六の巻には見られない。

「人間の地学」(六の巻 第十三丁オー第二十二丁ウ)においては、冒頭で自然の地学を人間の地学に先行させて記した理由が述べられている。この部分の原拠は不明。次に、世界における社会の進化のプロセスを、二つに大別(蠻野と文明開化)し、さらに4つのレベル(混沌、蠻野、未(半)開、文明開化)に分類し、詳しく具体的に国名をあげて記している(六の巻 第十四丁オー第十七丁オ)。なお、社会の進化を四段階に分ける考え方は、ヨーロッパ地誌の総論に於ける頭書(三の巻 第三丁オー第五丁ウ)で、既にMSGから転写した挿絵図(図番号28-31)をも掲載してヨーロッパ社会が発展する過程として言及されている。

二つの大別および4つのレベルの説明は、“Civil or political geography”の章中のThe states of societyの項での質問Q144-Q159の解答部分に相当する。ここで一つ注意すべき点として、六の巻の未(半)開の解説(MSGのQ157の解答部分後半に相当)において、福沢は、

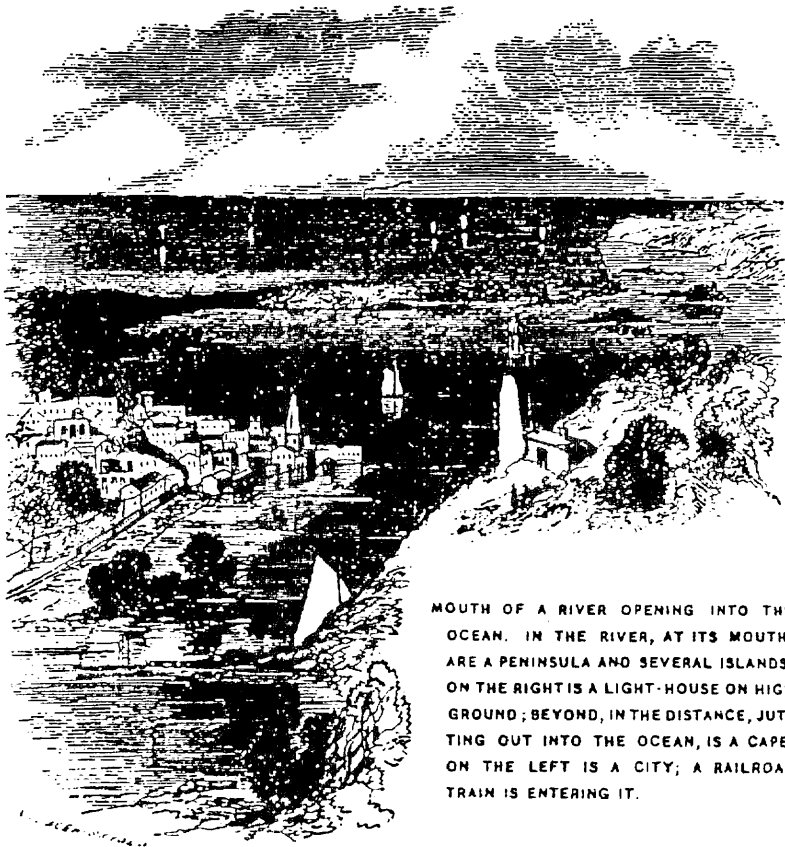


第2図 挿絵図 (図番号 99)

出典：『頭書』六の巻第7丁ウ。

NATURAL OR PHYSICAL GEOGRAPHY.

DIVISIONS OF THE LAND.



MOUTH OF A RIVER OPENING INTO THE OCEAN. IN THE RIVER, AT ITS MOUTH, ARE A PENINSULA AND SEVERAL ISLANDS. ON THE RIGHT IS A LIGHT-HOUSE ON HIGH GROUND; BEYOND, IN THE DISTANCE, JUTTING OUT INTO THE OCEAN, IS A CAPE. ON THE LEFT IS A CITY; A RAILROAD TRAIN IS ENTERING IT.

第3図 原拠本の図 (Mouth of a river...)

出典: *MSG.* (1872) p. 9.

“支那、土留古、辺留社等の諸国．．．”（六の巻 第十六丁ウ）と記しているが、MSGでは、“China, Japan, Turkey, and Persia are...” (p.38) と書かれている。福沢は、MSGにおいて二番目に列記された“Japan”を意識的に欠いて訳したのではなかろうか。佐藤（1994, p.7）は、“．．．本書（筆者注：『頭書』）に何故か日本は直接には登場しないが、『文明論之概略』に「土耳其、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し」（④16）（筆者注：『全集』4, p.16）と述べられていることから、日本は「半開」に位置付けられていること（筆者下線）と記している。佐藤の疑問への直接的答えにはならないが、一つのコメントとして、MSGに日本の国名が既に列記されていたことを示しておく。なお、三の巻 ヨーロッパ地誌の総論に於ける頭書中の挿絵図（図番号 30）で、未（半）開の国として「とるこ」、「ペルしや」が挙げられ、日本はここに於いても列記されていない。

上述の4つのレベルに分類する考え方は、福沢の地理学を分析する際、重要な鍵である。佐藤（1994, p.5）は、“これこそ（筆者注：佐藤は「発展段階説」と表記）が福沢の地理学に関する方法論であったといえる。”とし、それは、“当時のヨーロッパにおいては、むしろ一般的な考え方であり、．．．”とも述べている。福沢は、当時、欧米の文明開化の段階にある先進国と対比して、日本が置かれていた危機的状況を国民に認識させるために、社会の進化の4つのレベルを『頭書』中で提示し、強調している²⁵⁾。

次に、「人間の地学」では“世界中に帝国あり、王国あり、公国あり、侯国あり、或は共和政治の国あり。”（六の巻 第十七丁オ）と文章が続く。それはMSGの“Civil or political geography”の章中のPolitical divisionsの項での質問Q162-Q167の解答に相当する。さらに、“人民の多く集りて家を建て市町を開きし処を都会といふ．．．”（六の巻 第十七丁ウ）は、質問Q169, Q171の解答とほぼ一致する。最後に、“政府の体裁とは其国を治むる法の立方をいふ。その種類三あり。”（六の巻 第十八丁ウ）と続き、「もなるき」、「貴族合議」、「共和政治」の説明をして「人間の地学」を終える。政体（政府の体裁）は、MSGの“Civil or political geography”中のForms of governmentの項での質問Q175-Q183（Q182を除く）の解答に相当する。ただし、共和政治の“共和政治の趣意は．．．

国威を海外にまで耀かすを趣意とせり”（六の巻 第二十丁オー第二十二丁オ）の部分は、MSGには見当たらず原拠不明である。前文に続く本項の最終文章、“亜米利加合衆国にては．．．二年交代なり”（六の巻 第二十二丁オー第二十二丁ウ）は、MSGの質問Q184-Q186の解答とほぼ一致する。政体についても一の巻から五の巻までの各国地誌の説明中で随時、言及し強調している。MSGの“Civil or political geography”の章では、上記に続いて、Varieties of languages, Systems of religionの項が記載されているが、『頭書』においては、該当箇所はなし。言語と宗教の事項が翻訳されなかった理由は、判らない。

以上のような調査結果から、六の巻「人間の地学」の主要な部分における内容記述および挿絵図を含む内容項目の構成は、MSGの“Civil or political geography”の章に準じ、翻訳されているとみなして良いであろう。しかも、『頭書』の中心的な概念である社会の進化を四段階に分ける考え方と政体（政府の体裁）についての区分は、MSGに拠っていることが判明した。

後日、『頭書』とMSGとの対照を行い、訳文にない原文箇所あるいは逆に原文にない訳文箇所等を詳細に調査し、発表してみたい。

IV おわりに

筆者は、福沢が『頭書』を著述する際、参照し、執筆上、強い影響を与えた書物、MSGの著者 Mitchell および彼の著作について述べることで結語にかえる。

以下の Mitchell に関する伝記的事項は、主として *Dictionary of American biography*. Vol. 13. (1934). と *Biographical dictionary of American educators*. Vol. 2. (1978). によっている。Mitchell のフル・ネームは Sanuel Augustus Mitchell で、父親 William と母親 Mary の息子として 1792 年 3 月 20 日に Connecticut 州 Bristol で出生した。父親 William は、1773 年頃スコットランドから Connecticut 州 Bristol へ移住してきた。1815 年 8 月、Sanuel Mitchell は、Rhoda Ann Fuller と結婚した。若い頃、彼は、教師の職についていたが、当時の地理教科書中における解説・教授法に満足できなかった。彼は、経営力と共に文才を有していたので、Philadelphia における 40 年間、地理教科書、地図、地理入門書を改良するために著述し、出版することに尽力を傾けた。一時期、

地理教科書、地図等を年間40万部も販売した。このように需要が多くあった理由の一つは、最新の地理上の発見を図書等に組み込む努力を怠らなかったからである。

1831年、*A new American atlas* とアメリカ合衆国を幾つかにわけた区分図を出版し、引き続き移住地の地図を刊行した。南北戦争(1861-1865)の開始時期、彼は *Map of the United States and territories* を出版し、それは軍隊の要塞作りに役立った。

Mitchell が発行した初期の地図の多くは、J.H.Young によって彫られ、イギリスの有名なマップ・メーカー、John Arrowsmith (1790-1873) が作った同時期の地図と比較される。Mitchell は、地図学の分野にタイミング良く参入した。1803年から1806年にかけての Meriwether Lewis(1774-1809)と William Clark(1770-1830) による Missouri River の探検等に続き、人々はより新しい国土に関心をむけ、旅行地図やガイドブックを切望する時期であった。

Mitchell は、生徒の学力の発達段階に適合した学校地理システムのプランを早い時期から考えていた。そこで、“Mitchell’s (old) series of geographies”、後には、“Mitchell’s new series of geographies”²⁶⁾を刊行した。後者のシリーズの一冊が *MSG* である。上述の図書の多くは、多数の版次を重ね、改訂されて二十世紀初頭まで発売されていた。彼は、アメリカ地理学の発展に偉大な足跡を残して、1868年12月18日、Pennsylvania 州 Philadelphia にて死去。

Mitchell の著作(地理教科書)の日本への導入についてみてみよう。導入の最初の人物は、現時点では断定出来ない。しかし、福沢が『*<蘭学>窮理図解*』(1867年)の凡例に引いている点から、福沢は Mitchell の著作を導入した初期の人物の一人と考えて良いであろう。

既述のごとく、Mitchell の地理教科書(原書)は、明治初期から中期にかけて広く学校で採用された。また、Mitchell の地理教科書の翻訳書あるいは参照したことを明記した書物が刊行された。例えば、『万国地誌階梯』(松村精一郎訳、1878(明治11)年)²⁷⁾、『ミツエル地理書直訳』(谷 春雄訳、1887(明治20)年)²⁸⁾等がある。なお、筆者未見であるが翻刻本も刊行された様子である(高梨・出来(1993, p.33))。

本稿は福沢論吉の地理学を解明するための基礎的作業として、『頭書』を取り上げ、内容を調査・検討し、

原拠本を同定することを試みた。原拠本調査は、原資料所蔵の制約上の理由等で十分に行えなかった。また、原典とのチェックもできるだけ努力したが果たし得ない場合も多くあった。読者のご指摘によって、本調査を改善し、今後の研究を進めて見たい。本稿を作成するにあたり、元・一橋大学細谷新治教授に貴重なご助言を賜った。慶応義塾福沢研究センター並びに同センター 東田全義氏および慶応義塾大学メディアセンター 白石 克氏に資料の閲覧等にご協力していただいた。以上の方々に厚くお礼を申し上げる。

注

- 1) 『世界国尽』は、同版においても刷りが異なると、本文に訂正がなされたり、あるいは、慶応義塾蔵版目録に収録されている書名に違いが生じたりする場合もある。また、内容が同一であっても表紙が異なることもある。子細に点検すると、種々の書物が存在する。これらの考察は、書誌学的には重要であるが、本稿では触れない。
- 2) 再版では、初版の誤りを埋め木して訂正してある。
- 3) 富田(1964, p.16)によると、刊年について次のような見解を述べている。見返しに“明治四年辛未十二月再刻”と記されているが、再版六の巻に付されている慶応義塾蔵版目録中の書名を検討すると、再版が実際に発行発売された時期は、明治五年夏頃と富田は推定している。
- 4) 再版二の巻から五の巻までの本文等のノンブルは、初版と同じなので略する。
- 5) 『*<蘭学>*世界国尽』は、『頭書』の一の巻から五の巻までの本文のみを習字用本として草・行書体で記したものの、版下は福沢門下生であった内田晋斎(1848(嘉永元)年-1899(明治32)年)の筆による。
- 6) 地図(東の半世界・西の半世界)について『頭書』と『*<蘭学>*世界国尽』とを比較すると、両書の半世界図のサイズは同一であるが、図書の大きさの違いから、『頭書』の図に見られた縁飾りが『*<蘭学>*世界国尽』では省略されている。『頭書』の図では、原本(不明)にある縁飾りまでも忠実に複製したのではないかと。
- 7) 『*<真字>*世界国尽』は、『頭書』の一の巻から五の巻までの本文のみを楷書体で読本風に刻する。巻末に、“明治九年二月二日版權免許”と記されている。
- 8) 福沢の翻訳活動について、杉山(1986, p.230)は、“訳者としての彼の活動は『西洋事情初編』から『帳合之法』に至る、すなわち1866(慶応二)年から1874(明治六)年に至る、そして点数にかんしていえば中間の1870(明治二)年を頂点とする、この短い期間にほぼ集中している。”と述べている。

- したがって、『頭書』は、翻訳活動の頂点時の作品である。
- 9) 地誌型往来物とは、ある地域の風土、産物、人情風俗、名所旧跡等を記している往来物を指す。現在の社会科（地理）の教科書の性格に類似している面もある。
 - 10) 石川・石川（1967, p.78）を参照。
 - 11) 石川・石川（1967, pp.489-491）は本書を収録し、解題を付している（石川・石川（1967, pp.121-122））。
 - 12) 石川・石川（1967, pp.492-509）は本書を収録し、解題を付している（石川・石川（1967, p.122））。
 - 13) 本書の書誌的事項は、*The national union catalog pre-1965 imprints*. (以下 *NUC* と略す) Vol. 206 (1972, p.473) によると次ぎのとおり。Goodrich, Samuel Griswold, 1793-1860. Peter Parley's universal history, on the basis of geography. For the use of families... [c1837] および、慶応義塾大学メディアセンター所蔵本のタイトル・ページ裏に“Entered, according to the Act of Congress, in the year 1837,…”との記載があり、本書の初版の刊行は、1837年とみなして良いであろう。
 - 14) 政体の説明について、石川（1988, p.120）は、“概して、絶対君主制・専制政治の国国については、筆を簡略にして長所よりも多くの短所をかぞえ、反対に英国のような立憲君主制、米のごとき共和制については詳しく記述して、その長を挙げている。”と記している。福沢のこのような記述の仕方は、本稿中にも指摘した通り、福沢が自国の将来像を国民に理解させる意図から生じたのであろうと筆者（源）は考えている。
 - 15) 学制期の生徒の内には、小学時代、『頭書』中に掲載されている挿絵図に接し、更に、Ⅲ-1. で述べるように下等中学で挿絵図の原拠本（原書）に再び接する者もいた。このことも、場所のイメージを固定させる作用を助長したと推測する。
 - 16) 教育史的視点の項については、石川・石川（1967, pp.22-23）を参照。
 - 17) 本書の書誌的事項は次ぎのとおり。東野利孝(1906): 『慶応義塾図書館 洋書目録』。(Catalogue of the Keiogijuku library). 東京 慶応義塾, 418p. 本目録は、慶応義塾図書館において最初の洋書蔵書目録（冊子体）である。
 - 18) 本目録は、次ぎの資料に収録されているものを利用する。金子宏二：『藩学養賢堂蔵洋書目録』について——慶応三年福沢諭吉寄来本——。福沢諭吉年鑑, 8, pp.207-217. (初出は早稲田大学図書館紀要 第20号) 本目録は、福沢が再度、渡米した際、購入した図書中、仙台藩に分かった分を記載している。
 - 19) 本書の書誌的事項は、*NUC* Vol. 388 (1975, p.100) によると次ぎのとおり。Mitchell's new school geography. Fourth book of the series. A system of modern geography, physical, political, and descriptive; accompanied by a new atlas of forty-four copperplate maps. Philadelphia, E. H. Buter & co., 1865. 456p. illus. 上記のように、初版の刊行は、1865年である。一橋大学附属図書館では刊年不明のものを所蔵している。一橋大本と複製本とを比較すると、両者の総ページは456p.で同じであるが、本文の記事、データ等に違いがあり、挿絵図の掲載ページも異なる箇所が幾つも見出だされる。内容表記から判断して、一橋大本は複製本より刊年が新しい版である。従って、本稿では、原則として複製本を使用する。また、上記のように姉妹書として、手彩地図を含む *Mitchell's new school atlas* (1865)があり、慶応義塾大学メディアセンターにおいて1874年版を所蔵している。
 - 20) 複製本の書誌的事項は、次ぎのとおり。高梨健吉・出来成訓監修(1992): *Mitchell's new school geography*. 東京 大空社, [6], 456p. (英語教科書名著選集 第4巻)。
 - 21) 本書の書誌的事項は、*NUC* Vol.123 (1970, p.133) によると次ぎのとおり。*Cornell's high school geography...N.Y.,D.* Appleton & co., 1856. 上記のように、初版の刊行は、1856年である。Appleton & co. は、New York の出版社兼書店で、福沢が再度の渡米の際に、立ち寄った店である。本稿で利用した *Cornell's high school geography* には、タイトルページに“慶応義塾之印”および“慶応義塾書館”という蔵書印二顆が捺印され、墨字で“第三十九号”と書かれている。“慶応義塾之印”から判断して、本書は1868(慶応4)年4月から1869年に塾で学生貸与用に所蔵したものであることが判る。
 - 22) *Cornell's primary geography*. の原本に接することが不可能であったので、本稿では、“複製”と称している『地学初歩』を使用する。*Cornell's primary geography*. と『地学初歩』との関連については、次ぎの論文が詳しい。石山 洋(1965): 英学における地理研究。日本英学史研究会研究報告, 26, 1-4.
 - 23) 本書の書誌的事項は、*NUC* Vol.64(1969, p.115)によると次ぎのとおり。Bohn, Henry George. 1796-1884. A pictorial hand-book of modern geography, on a popular plan, compiled from the best authorities, English and foreign...., 1861. 上記のように、初版の刊行は、1861年である。
 - 24) 山住（1970, p.35）は、六の巻について、“この本編は有名なが、そのあとについている地理学総論も、地理教育にとって重要である。”と述べている。
 - 25) Takeuchi, K.(1974, p.5) は、社会の進化の四つのレベルに関連して、“This conviction, this aspiring towards civilization was just what the Sekai Kunizukushi appealed most to in the readers of those days”と述べている。
 - 26) *The new primary geography*. (1875年刊、一橋大学附属図書館蔵)のタイトル・ページ裏の“Advertisement”によると、“Mitchell's new series of geography”には次ぎの図書が含まれる。*Mitchell's first lessons in geography*., *Mitchell's new primary geography*., *Mitchell's new intermediate geography*., *Mitchell's new school geography and atlas*, *Mitchell's new physical geography*., *Mitchell's new outline maps*., *Mitchell's new ancient geography*..
 - 27) 本書の凡例によると、“(ミツチエル)氏著大小ノ二地理書原本ニ依リ訳出スト雖。．．”(凡例, p.3)と記されているが、本書が、“Mitchell's new series of geography”中のいかなる書物を翻訳したのは同定できない。本書には、挿絵図はなく、地名の読み方については『瀛環志略』（徐繼畲, 1848

年),『地理全誌』(Muirhead, W. 慕維廉(中), 1858年),『地球説略』(Way, R. Q. 裨理哲(中), 1860年)等を参考にし、唐音の漢訳字を当てている。校訂版が1881(明治14)年に刊行されている。

28) 本書は,“Mitchell's new series of geography”中の, *Mitchell's new primary geography*. を訳出したのではなかろうか。本書の目次構成は, *Mitchell's new primary geography* に近似しているが, 本書には, 原本にある挿絵図・地図はなく, また, 原本の全ての文章を翻訳していない。

文献

石川 謙・石川松太郎(1967):『日本教科書大系 往来編』第9巻 地理(1), 講談社, 602p.
 石川松太郎(1988):『往来物の成立と展開』, 雄松堂, 203, 12, 22, 79p.
 石田龍次郎(1969):『東京地学協会報告』(明治一二—三〇年)——明治前半の日本地理学史資料として——。一橋大学研究年報社会学研究, 10, 1-83.
 太田臨一郎(1976): 福沢諭吉著訳書の原拠本について。福沢諭吉年鑑, 3号, 120-143.
 慶応義塾(1958):『慶応義塾百年史』上巻, 慶応義塾, 819p.

慶応義塾(1958-1964):『福沢諭吉全集』全21巻, 慶応義塾。
 佐志 傳(1986):『『慶応義塾社中約束』付・参考資料』, 慶応義塾福沢研究センター, 273p.
 佐藤友計(1994): 福沢諭吉の地理教育観に関する一考察。新地理, 42(3), 1-12.
 杉山忠平(1986):『明治啓蒙期の経済思想——福沢諭吉を中心に——』, 法政大学出版局, 282p.
 高梨健吉・出来成訓(1993):『英語教科書の歴史と解題』, 大空社, 253p。(英語教科書名著選集・別巻)
 辻田右左男(1975):『日本近世の地理学』, 柳原書店, 325, 12p.
 富田正文(1964):『福沢諭吉書誌』, 大塚巧芸社, 44p.
 西浦英之(1970): 近世に於ける外国地名呼について。皇学館大学紀要, 第8輯, 227-324.
 日本地学史編纂委員会(東京地学協会)(1993): 西洋地学の導入(明治元年~明治24年) <その2>——『日本地学史』稿抄——。地学雑誌, 102, 878-889.
 明治文化研究会(1969):『明治文化全集 別巻 明治事物起源』, 日本評論社, 14, 1496p.
 山口一夫(1992):『福沢諭吉の亜欧見聞』, 福沢諭吉協会, 435p.
 山住正己(1970):『教科書』, 岩波書店, 216p.
 Takeuchi, K. (1974): The origins of human geography in Japan. *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, 15(1), 1-13.